

森脇遺跡(第4次)・
遊山城跡発掘調査報告

1995・3

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

森脇遺跡（第4次）	三重県上野市市部字森脇
遊山城跡	三重県阿山郡伊賀町愛田字遊山
- 2 本書は、平成6年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第2分冊一2である。
- 3 調査に係る費用は、県農林水産部の全額負担による。
- 4 調査は、下記の体制で行った。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
森脇遺跡（第4次）	調査第一課 技師 竹内 英昭
	管理指導課 研修員 増田 博
遊山城跡	調査第一課 主事 小林 秀
	管理指導課 研修員 松本 美先
- 5 調査にあたっては、三重県農林水産部耕地課、上野農林事務所、上野市教育委員会、伊賀町教育委員会、及び地元の方々の協力を頂いた。
- 6 本書の執筆・編集は各担当者があたり、文末に執筆者名を記して文責を明らかにした。
- 7 本書の方位は、全て真北を用いた。なお、当地域の磁針方位は、西偏6度20分（昭和55年、国土地理院）である。
- 8 本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

S B = 挖立柱建物	S H = 積穴住居	S D = 褐	S R = 旧河道	S K = 土坑
-------------	------------	---------	-----------	----------
- 9 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 上野市市部 森脇遺跡(第4次)	1
II 阿山郡伊賀町 遊山城跡.....	25

図版目次

森脇遺跡(第4次)

P L. 1 調査前全景・調査後全景.....	19	P L. 4 S B 410・411・S R 413.....	22
P L. 2 S R 401・S B 405～407.....	20	P L. 5 出土遺物(1).....	23
P L. 3 S R 413木組み遺構.....	21	P L. 6 出土遺物(2).....	24
遊山城跡			
P L. 7 南辺土塁調査前風景.....	35	P L. 10 虎口周辺・堀割.....	38
P L. 8 虎口調査前風景・調査作業風景.....	36	P L. 11 南辺土塁断面・西辺土塁断面.....	39
P L. 9 調査作業風景・南辺土塁.....	37		

挿図目次

森脇遺跡(第4次)

第1図 遺跡位置図.....	1	第8図 旧河道S R 413木組み遺構.....	10
第2図 調査区位置図.....	2	第9図 旧河道S R 413実測図.....	10
第3図 調査区平面図.....	4	第10図 出土遺物実測図(1).....	11
第4図 遺構実測図.....	6	第11図 出土遺物実測図(2).....	12
第5図 土層断面図.....	7	第12図 出土遺物実測図(3).....	13
第6図 挖立柱建物S B 405・406・407実測図	8	第13図 出土遺物実測図(4).....	14
第7図 壑穴住居S H 410・411実測図.....	9	第14図 伊賀国府跡前田地区出土土器.....	16
遊山城跡			

第15図 遺跡位置図.....	25	第20図 遺構配置図.....	30
第16図 遺跡周辺地形図.....	26	第21図 立面図.....	31
第17図 調査区位置図.....	27	第22図 出土遺物実測図.....	32
第18図 調査前測量図.....	28	第23図 土塁断面土層図.....	32
第19図 調査後測量図.....	29		

I 上野市市部 森脇遺跡（第4次）

1 過年度の調査経過

森脇遺跡は、上野市市部森脇を中心として、総面積40,000m²ほどにまで広がる広域遺跡で、昭和63年度に調査が開始されて以来、過去三重県教委・上野市教委の双方がそれぞれ3次にわたり（但し平成3年度市教委調査分は城田遺跡と命名）、計6度の調査が実施されている。

昭和63年度三重県の第1次調査では、主な遺構として縄文時代晩期～弥生時代の旧河道、縄文時代晩期の貯蔵穴4基、弥生時代の溝2条、奈良時代の掘立柱建物16棟、柱列1条、井戸4基、溝数条等が検出された。掘立柱建物の内、最大のもの（5間×2間）は、現在の「あわれその森」の直下に続くものと思われ、4棟は總柱建物で倉庫と考えられる。

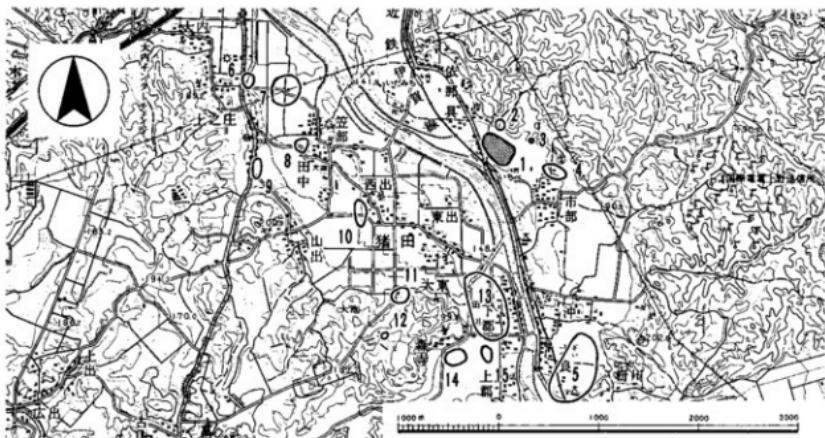
井戸のうち1基は、方形木枠組で枠板の残りがよく、13段まで確認でき、外側には枠組みの位置を示す墨書きがあった。

主な遺物は弥生時代の石鏃、壺、甕、木製の砧・

平鍬と丸鍬の未製品、奈良時代の須恵器壺・杯・蓋・横瓶・円面鏡、土師器杯・甕、斎串・糸巻・曲物の底板などの木製品も出土した。さらに、「大井」「千倉」等の墨書き器も數点出土したが、全体的に須恵器の出土が多いのが特徴的であった。

昭和63年度上野市の調査では、主な遺構として縄文時代の貯蔵穴9基、弥生時代後期の溝1条、古墳時代末の土坑1基、縄文時代～奈良時代頃の旧河道2条、奈良時代～平安時代の掘立柱建物4棟、溝30条、土坑14基等が検出された。主な遺物は、奈良時代の須恵器杯・盤・壺・甕・鉢・平瓶、土師器杯・皿・甕・鍋であり、中には、円面鏡や「富貴」と墨書きされた須恵器杯蓋や「大井」と線刻された土師器も出土している。また、木製品では曲物や鋤が出土し、弥生時代の石鏃・石庖丁も確認された。

平成元年度の県第2次調査では、主な遺構として弥生時代中期～江戸時代の自然流路、溝、掘立柱建

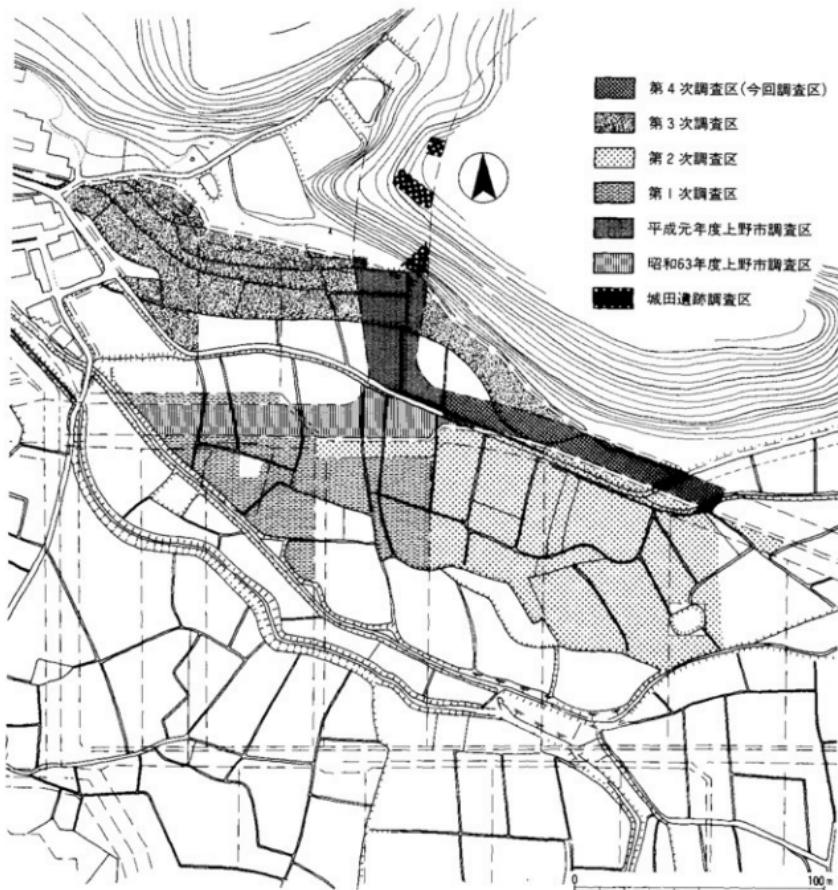


第1図 遺跡位置図 (1:50,000)

物、土坑、ぬか塚古墳の周溝を検出した。ぬか塚古墳は、後世の開墾や江戸時代の瓦粘土の採取により一部が残っているにすぎなかったが、調査の結果帆立貝形前方後円墳であり、墳長約37m、後円部径約25~28mでやや楕円形、周溝を含めた全長は約48mであることが判明した。また、古墳時代の川跡からは井堰を検出した。川が比較的狭くなる場所に土をダム状に積み上げ、その側面を矢板で、頂上を丸太で保護し、さらに、約30cm間隔で杭を打ち込んで

あった。掘立柱建物は主なもので45棟確認できた。

時期的には、飛鳥時代・奈良時代・平安時代の3時期に分かれしており、その大部分は飛鳥時代～奈良時代のものであった。飛鳥時代のものは、6間×2間の細長い特徴的なものがあり、奈良時代のものは、県第1次調査分と合わせると10棟ほどのまとまりをもち、当地方の有力者の屋敷跡の可能性がある。柱穴には、柱の周りを石で固定したもの、根石や礎石をもつものが多く、柱がそのまま残っているものも



第2図 調査区位置図 (1:2,000)

数列あった。

主な遺物としては、土器類は弥生時代中期～後期の壺・甕、大量の古墳時代・飛鳥時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の瓦器碗が出土した。木製品は大部分が脚状木製品をはじめとする建築部材で、一部火を受けた状態のものがあった。その他、槽などの木製容器類も出土した。また、石製品は石庖丁・磨製石斧・石匙等が出土した。

平成元年度上野市の調査では、主な遺構としては、繩文時代～古墳時代の旧河道、繩文時代の貯蔵穴1基、古墳時代の土坑1基、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物3棟、溝10条が検出された。主な遺物としては、弥生土器壺、古墳時代の土師器壺、須恵器杯身、滑石製勾玉、奈良時代の土師器、須恵器杯身・杯蓋、平安時代の黒色土器碗、綠釉陶器、鎌倉時代の瓦器碗・皿などが出土している。

平成2年度県の第3次調査では、主な遺構としては堀・堅穴住居・溝・掘立柱建物・火葬墓が検出されたが、遺構の中心は古墳時代後期～平安時代中期

であった。古墳時代後期のものは堅穴住居を中心で40数棟検出されており、飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物のうち大型のものは、一辺70cmの方形柱掘方をもち、一部は並んで配置されていた。また、平安時代中期の掘立柱建物は8間×6間の大型のもので、周囲を取り囲む浅い堀を伴っていた。主な遺物としては弥生中期～後期の壺・甕・高杯・土師器杯・甕・高杯・皿・台付皿・須恵器杯身・杯蓋・高杯・器台、黒色土器碗、綠釉陶器碗、灰釉陶器碗、青磁碗、白磁碗、土馬、土錐、勾玉、砥石、子持勾玉、石巖、有孔円板、墨書き土器・石錐が出土した。

平成3年度上野市の調査は、森脇遺跡の北側の山腹に隣接する城田遺跡において行われた。城田遺跡は、平成元年度の上野市の調査地で検出された旧河道の上流にあたる地域である。主な遺構としては繩文時代～古墳時代の旧河道、平安時代の墓塚1基、弥生時代中期～後期の溝1条が検出された。主な遺物は弥生土器高杯・甕・土師器皿・須恵器片・黒色土器皿・石巖などが出土した。
(増田 博)

2 周辺の遺跡

森脇遺跡(1)の周辺には、多くの遺跡が知られている。主なものをあげると、森脇遺跡のすぐ北側丘陵部には森脇遺跡と連続するとみられる城田遺跡(2)があり、森脇遺跡内に含まれるぬか塚古墳との関連で注目されるうま塚古墳(3)は、東方の丘陵上に所在する。

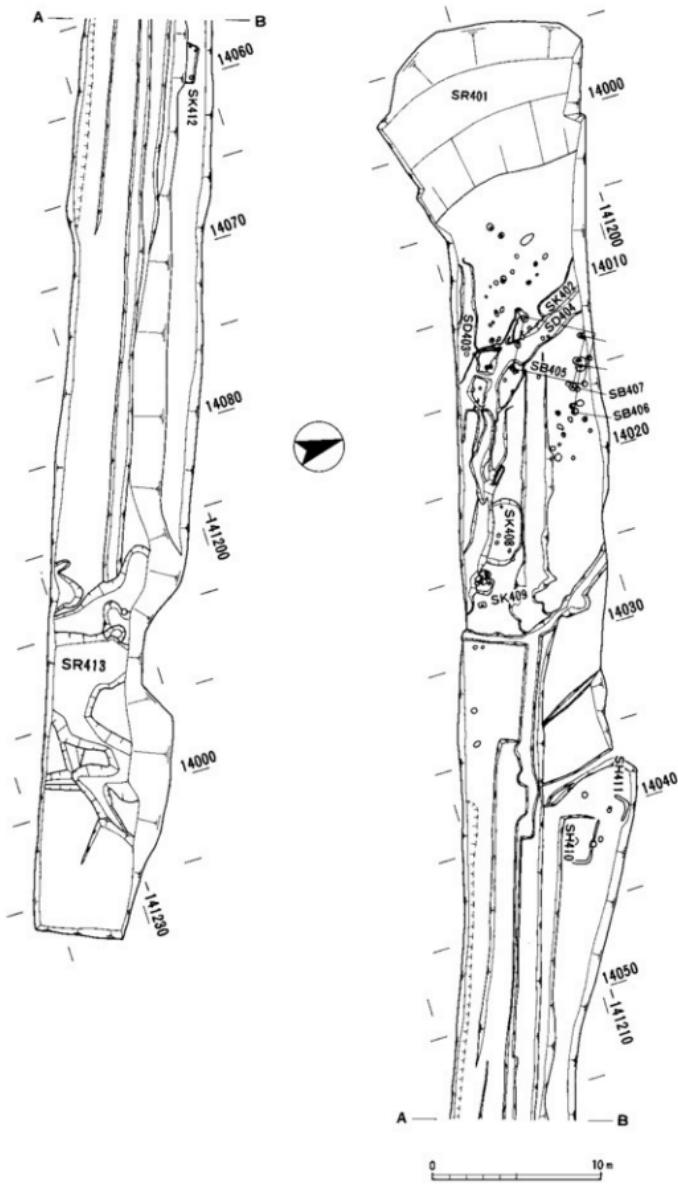
森脇遺跡と同じ木津川右岸には、他に平成元年度および2年度に発掘調査された澤田遺跡(4)があり、弥生～室町時代にかけての複合遺跡であることが判明している。また『東大寺要録』に記録され、川原寺系の軒丸瓦の出土でも知られる財良寺跡を含む才良遺跡(5)も弥生時代以降の著名な遺跡である。

木津川左岸には伊賀郡衙推定地ともいわれ、延暦紀年銘の木簡の出土や掘立柱建物群で注目される下郡遺跡(13)や、その周辺に弥生～古墳時代の堅穴住

居群や中世の水田跡が検出された森寺遺跡(14)・岩ヶ上遺跡(15)がある。

下郡遺跡の西方丘陵部には奈良時代の墨書きあるいは刻畫土器が出土した唐木谷遺跡(11)、平安時代の窯跡とみられる夫婦塚池窯跡(12)がある。

同じ左岸の上野市猪田～上之庄村付近には、弥生時代～奈良時代にかけての複合遺跡である横枕遺跡(10)や土師器窯を含むといわれる神座山遺跡(9)、繩文前期の北白川下層式の土器が多量に採集されている田中遺跡(8)、さらに昭和48年度に発掘調査され、弥生後期の土器が出土した山ノ川遺跡(6)などがあり、山ノ川遺跡に近い神部遺跡(7)では昭和55年度の調査で、落ち込み状の遺構から、古墳時代初頭の土器や槽などの木製品が多量に出土している。



第3図 調査区平面図 (1:300)

3 遺構

調査区の中央部を中心に大半は削平を受けており、遺物包含層も調査区の両端付近で認められたのみであった。調査区中央部付近には削平前の地形を残すところがあり、削平は検出面より約1m以上の深さに及ぶところも存在する。調査区を縦断あるいは横断するように、数条の現代溝がみられたが、主な遺構としては、弥生時代以降の旧河道2条、古墳時代～奈良時代にかけての溝1条、堅穴住居2棟、土坑3基および掘立柱建物3棟を検出することができた。

旧河道 S R401 調査区の西端近くで南流するよう検出された。平成元年度上野市調査でも、S R401と接続すると思われる旧河道が確認されている。

S R401は、幅7m、長さ約12mまで確認された。大きさは3層に分層可能で、河道機能が停止して後の堆積層であるシルト質の粘土層からなる第I層と細砂あるいは粘土層からなる第II層、そして粗砂または有機質を含む粘土層からなる第III層で構成される。

出土遺物としては、第I層で古墳時代の遺物が若干みられたが、以下の層からは流木などの自然木が多く、土器はわずかに弥生時代中期～後期のものが2点ほど確認するに留まった。

旧河道 S R413 複雑な流路をとるが、本来旧河道と認識できるのはより広範囲となることが予想されるが、出土遺物の有無をもって、遺構の是非を決定した。

遺構の基本層序は3層に別れる。第I層は、河道機能が停止した後に堆積した茶褐色系の粘質土層で、弥生時代～奈良時代までの遺物を含む。

第II層は、暗褐色系の粘質土層と乳白色系の砂層との混層で形成されており、流木等を含む。弥生時代～飛鳥時代の遺物を多く含んでいた。

また、調査区外にも延びる木組み遺構が検出された。元はS R413全体に及んでいた可能性があるが、残存部でみると、河道の两岸に沿って杭列があり、北半部では杭と岸の間に横木が渡されており、護岸が目的であることは明らかだが、南半部は、流れに対し木材の側を向けるように、比較的乱雑に並べ、

杭で流出を防ぐような構造になっている。

第III層は、細砂～極粗砂までを含む砂層を主とし、有機質を含む粘土層の混層とするもので、弥生時代の遺物を多量に含んでいる。

S R413は、県第2次調査の際にも、その延長が確認されており、本来は、調査区の北方の開析谷の流路であったとみられる。

出土遺物は、第I層より須恵器杯蓋・杯身・高杯・横瓶・広口壺・甕、土師器杯・高杯・蓋・瓶・甕、石庖丁などがあり、須恵器杯蓋のなかには墨書が認められるものがあった。

第II層からは弥生土器高杯・壺・長頸壺・台付甕・須恵器杯蓋・杯身・高杯・罐・甕、土師器杯・高杯・瓶・甕・甕、砥石など、第III層からは弥生土器高杯・蓋・広口壺・長頸壺・甕・器台、および石庖丁、砥石、サスカイト剝片などが出土した。

堅穴住居 S H410 調査区北壁に沿って大きな削平を免れた傾斜面西端近くに、壁溝の一部と柱穴2ヶ所を検出した。

残存状態が悪いため、本来の規模は不明であるが、柱間および壁溝との間隔から復原すると、一辺約5mほどと推定できる。

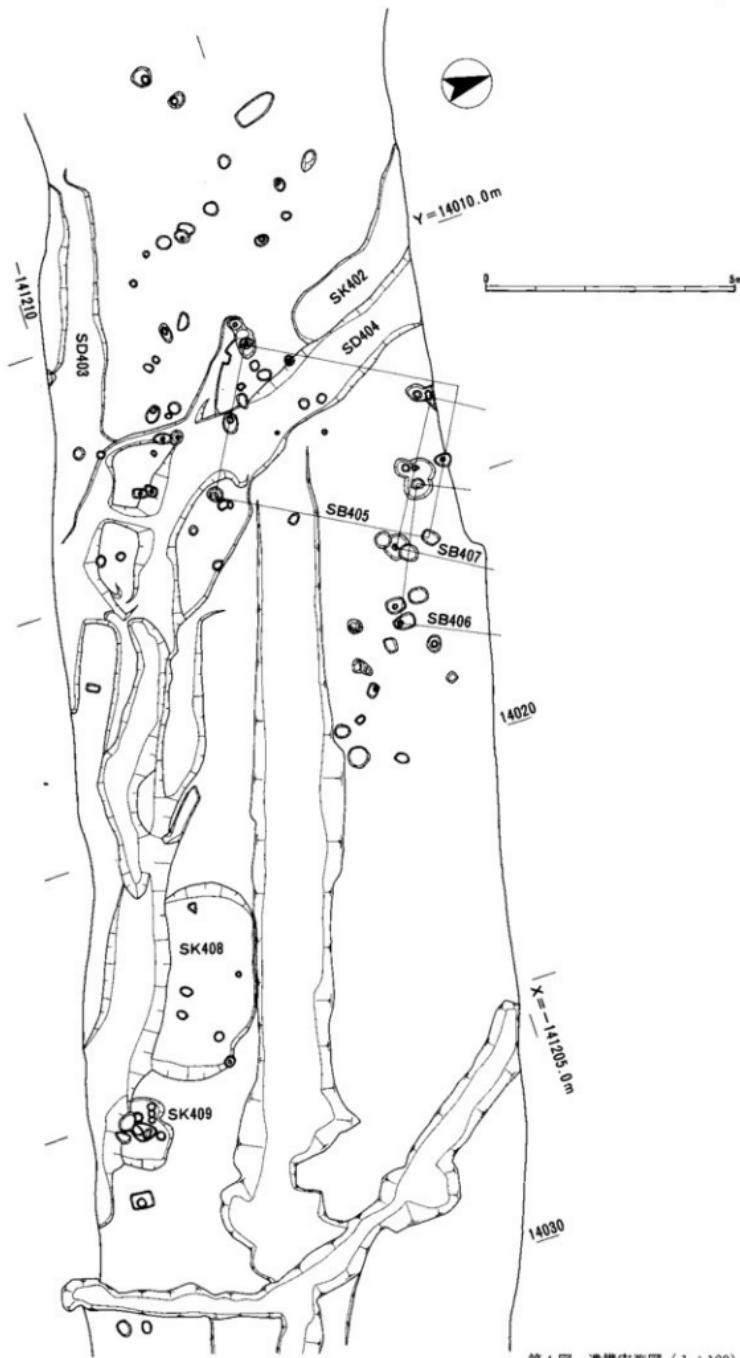
埋土および柱穴から土師器杯・壺・甕が出土し、古墳時代中期に比定できる。

堅穴住居 S H411 S H412に北接して検出された。わずかに北側壁溝の一部と柱穴2ヶ所が残存しており、S H410同様柱間および壁溝との間隔から復原すると、一辺約3.6mほどである。

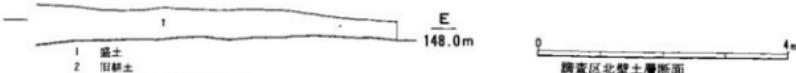
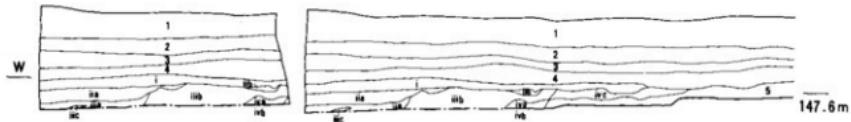
出土遺物はみられなかったが、S H410との位置関係からすれば、S H410に先行する可能性が強い。

掘立柱建物 S B405 柱穴の検出ができなかった箇所が多いが、梁桁2間・棟桁3間程度の規模と推定される。梁桁での柱間間隔は、約1.55mをはかる。柱穴から土師器杯・壺・甕片が出土した。細片であるため詳細を欠くが、古墳時代後期以降と考えられる。

掘立柱建物 S B406 大部分が調査区外へ延びるため、全体の規模は不明であるが、梁桁は2間と考



第4図 遺構実測図 (1 : 100)



調査区北壁土層断面

1 塵土
2 田耕土
3 混灰茶色砂質土（遺物含む層）
4 暗褐色細砂質土（遺物含む層）
5 明灰色シルト質土（地山）
6 明灰色砂質土（暗灰色土混り）
7 乳白色砂質土（地山）
8 暗茶褐色砂質土（SB407ピット）
9 暗茶褐色砂質土（乳白色土混り、SB407ピット）
10 暗茶褐色砂質土（SB405ピット）
11 綠灰色シルト質粘土（地山）
12 暗灰色シルト質粘土（地山）
13 淡青灰色粘土（砂泥）
14 明灰色粘土

(i ~ viは、SR401の埋土)

iia 淡青灰色細砂

iib 明灰色粗砂

iic 暗灰色粗砂

iid 淡青灰色細砂（有機質含む）

iie 暗褐色細砂（有機質含む）

iif 明灰色細砂

iig 暗白色細砂（有機質含む）

iih 乳白色中砂

iiv 暗灰色砂質シルト

ivb 暗褐色粘土

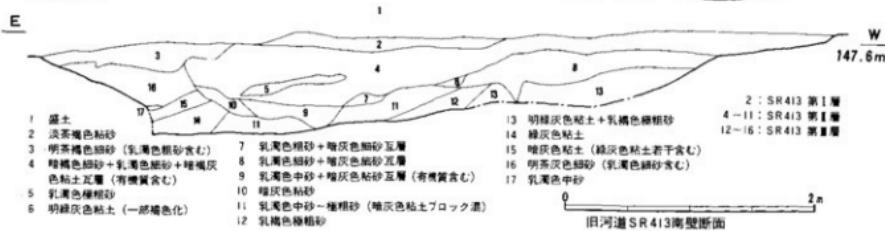
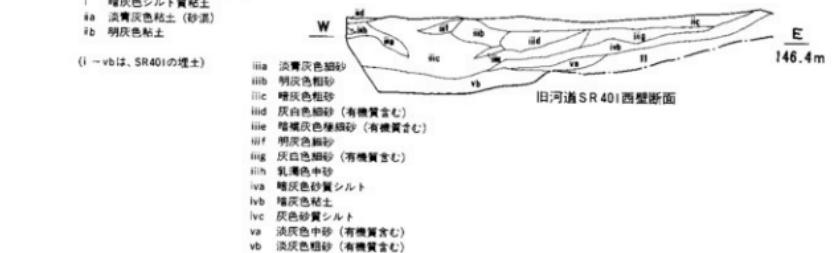
ivc 灰色砂質シルト

vii 淡青灰色中砂（有機質含む）

viii 淡青灰色粗砂（有機質含む）

旧河道SR401西壁断面

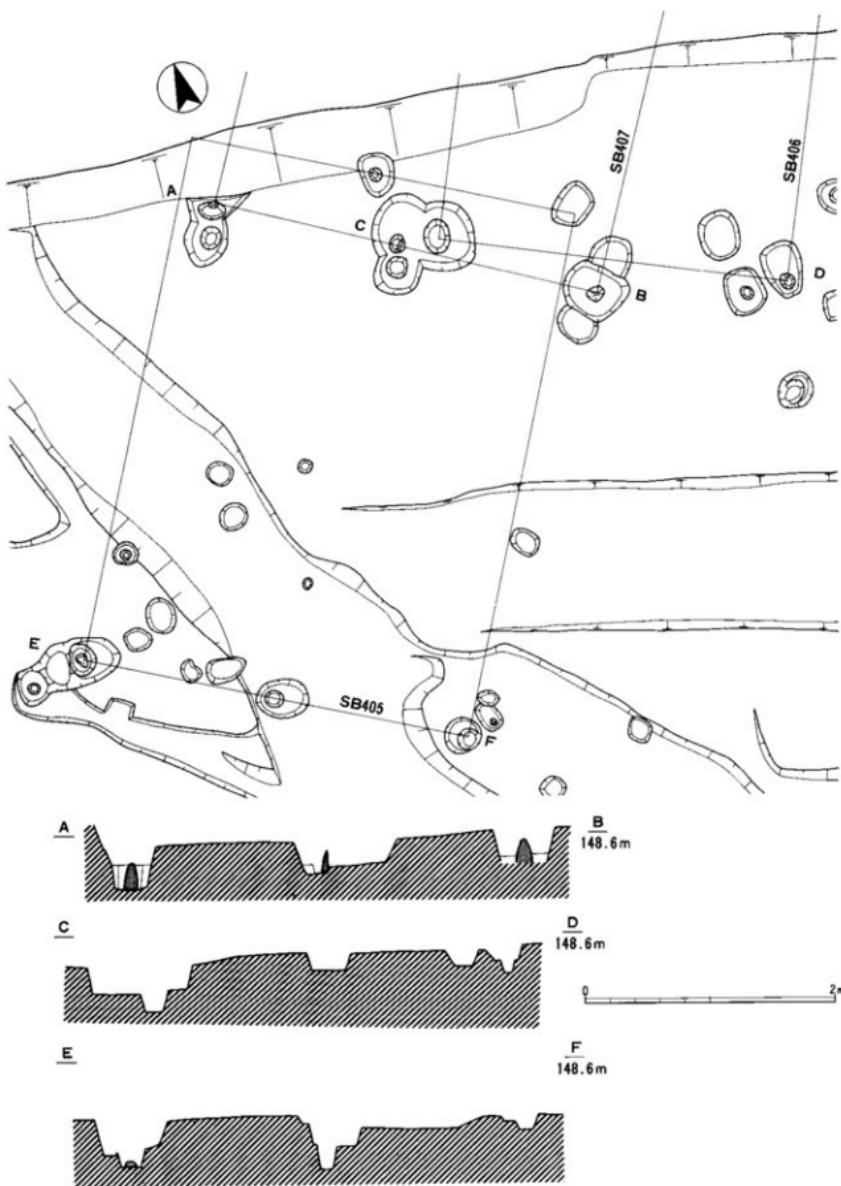
146.4m



2 : SR413 第Ⅰ層
4 - 11 : SR413 第Ⅱ層
12 - 16 : SR413 第Ⅲ層

旧河道SR413南壁断面

第5図 土層断面図（下段1:40, 上・中段1:80）



第6図 指立柱建物SB405・SB406・SB407実測図 (1:40)

えられる。柱間間隔は1.4mと、SB405よりやや狭い。一部に柱材が残存していた。

柱穴より須恵器杯蓋・甕、土師器壺片などが出土した。須恵器の杯蓋は、古墳時代後期以降のものとみられる。

掘立柱建物 SB407 SB406同様、梁桁しか判明しないが、梁桁2間分を確認することができた。柱間間隔は、約1.6mをかる。検出された3基の柱穴にはいずれも柱材の一部が残存していた。

柱穴より須恵器壺片が出土したが、時期不明である。ただし、SB406と柱穴の一部が重複し、SB406の方が新しいため、SB407も古墳時代後期以降のものと考えられる。

土坑 SK402 溝SD404と一部重複する可能性があるが、平面的には明確な前後関係は追及できなかつた。調査区外へ続くとみられるが、幅約1m、長さ約4m以上、深さ5cmと浅い。

遺物は、土師器壺、須恵器杯A・杯B・甕などが出土し、須恵器から7世紀後半～8世紀初頭に比定できるものと思われる。

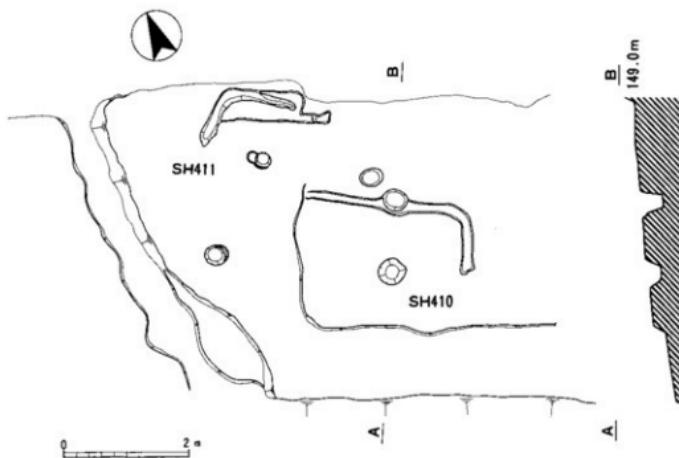
土坑 SK408 長径4m、短径1.7m、深さ10cmほどの椭円形の土坑で、SD404と一部重複し、SK408の方が新しい。埋土は單一で、弥生土器片、須恵器蓋杯・甕などが出土した。古墳時代後期か、あるいはもう少し下る時期と考えられる。

土坑 SK409 平面形は不整形で、底面から小穴がみられたが、性格不明な土坑である。土師器壺片や須恵器片が出土したのみで、時期不明な遺構である。

土坑 SK412 削平を免れた丘陵尾根部分に全体の一部が検出された。土坑としたが、堅穴住居跡の可能性もある。残存状態の割りには比較的出土遺物が多く、須恵器杯身・甕・壺、土師器壺・壺片などが出土した。これらから、古墳時代後期に比定できる。

溝 SD403 調査区の南壁に沿って確認された溝で、溝東側はSD404と合流し、西端は浅くなり消失する。

土師器杯・高杯・甕、須恵器蓋杯・甕など古墳時代後期の遺物が出土した。



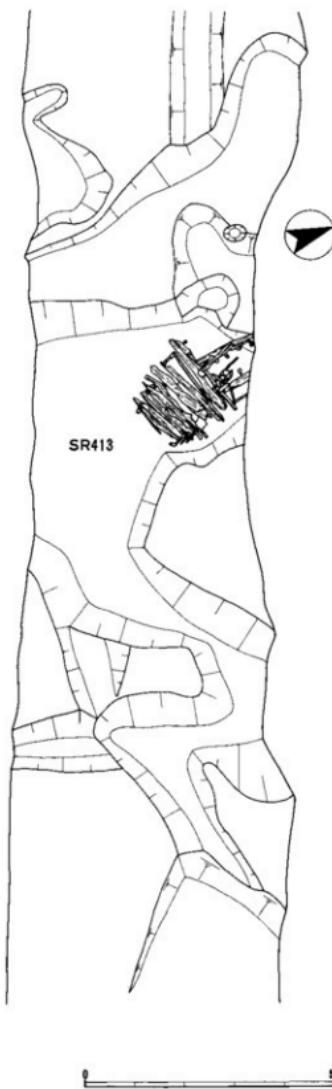
第7図 堅穴住居SH410・SH411実測図(1:80)

溝 S D404 調査区を斜めに横断するように流れ
る溝で、幅1~1.3m、深さ15~35cm、総延長約21
mまで確認できた。埋土に粗砂層を含むことから、
ある程度の水流があったと思われる。

出土遺物としては、土師器杯・高杯・壺・甕、須
恵器蓋杯・高杯・短頸壺・平瓶・甕・器台のはか、
ミニチュア土器などもあり、古墳時代後期~奈良時
代に比定できるものである。



第8図 旧河道S R413木組み遺構 (1:40)



第9図 旧河道S R413実測図 (1:100)

4 遺 物

(1) 弥生時代

弥生時代の遺物は、旧河道S R401および413から出土している。

旧河道S R401第II・III層

弥生土器壺(1) 口縁部が内折気味にたちあがる受口状口縁壺。口縁端部に平坦面をもつ。受口状の口縁部外面の上下端にキザミメを施す。頸部外面には櫛状工具による断続的な直線文を施す。

内面にはヨコ方向のハケメを施す。中期後半に比定できるものと思われる。

弥生土器高杯(2) 口縁部のみの破片であるが、その形状から高杯の杯部と推定される。口縁部をヨコナデし、端部は丸くおさめている。後期に比定さ

れるものである。

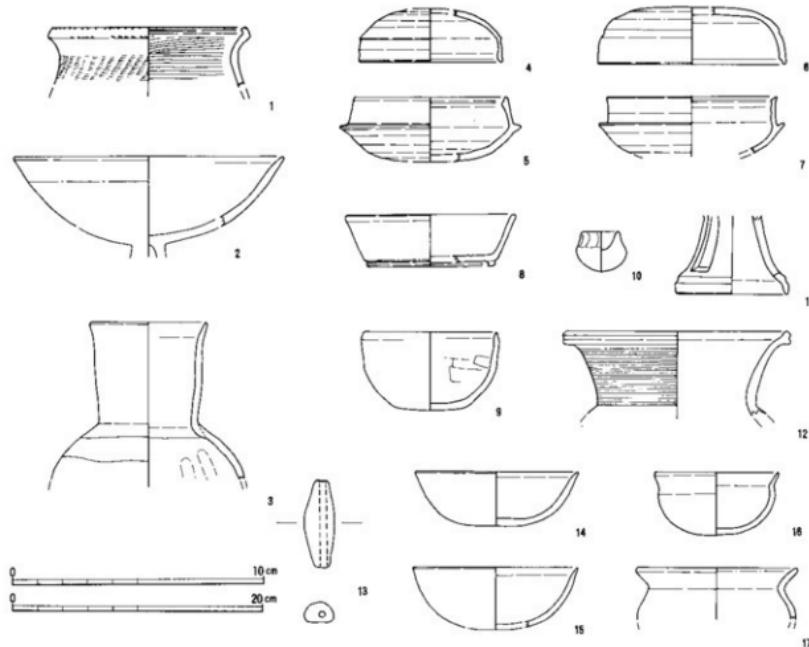
旧河道S R401第I層

弥生土器長頸壺(3) 口頸部が長く直上にたちあがり、口縁部がやや外反する。後期に特徴的な器形である。

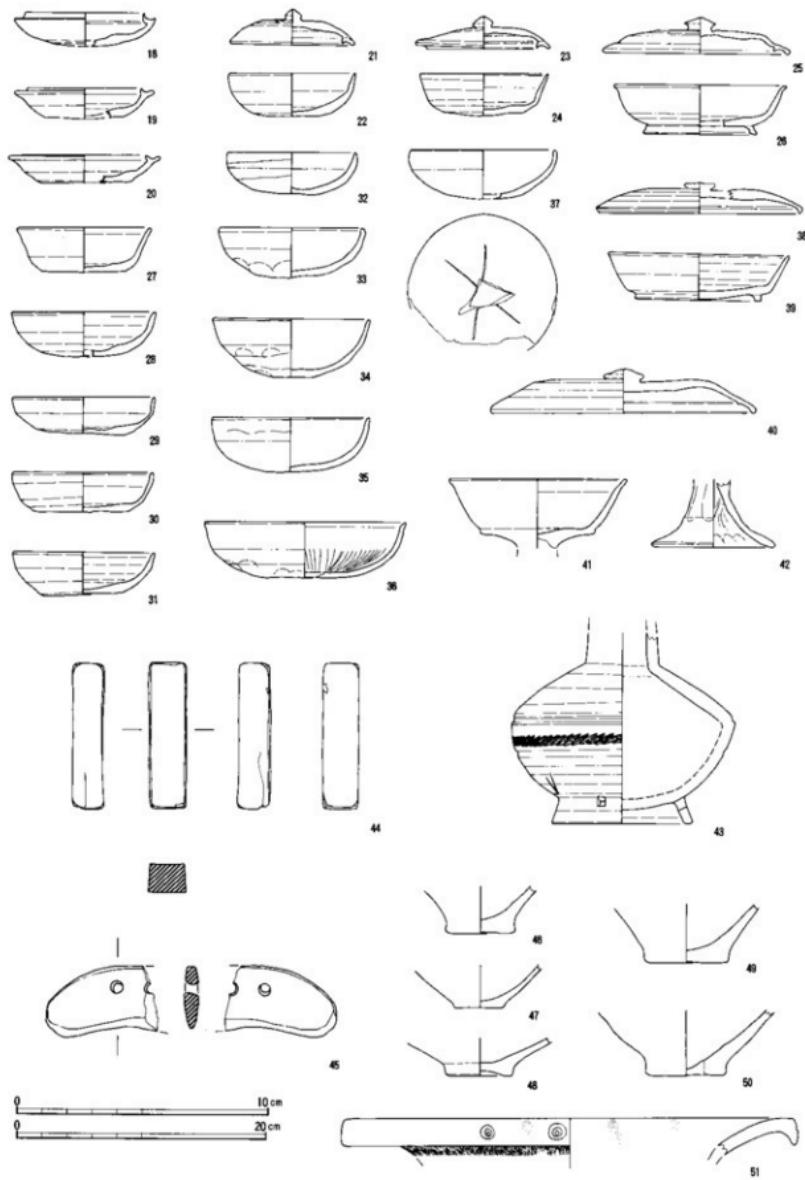
旧河道S R413第III層

弥生土器壺(61・62・71・72) 受口状口縁のもの(61・62)と、く字形に外反する口縁のもの(71・72)がある。前者は口縁下端に刺突文をめぐらすもので、(62)は端部に内傾する平坦面をもつ。また、(71・72)は、卵形あるいは球形に近い体部に外反する口縁部がつく。(72)は体部内面にユビオサエ痕を残す。

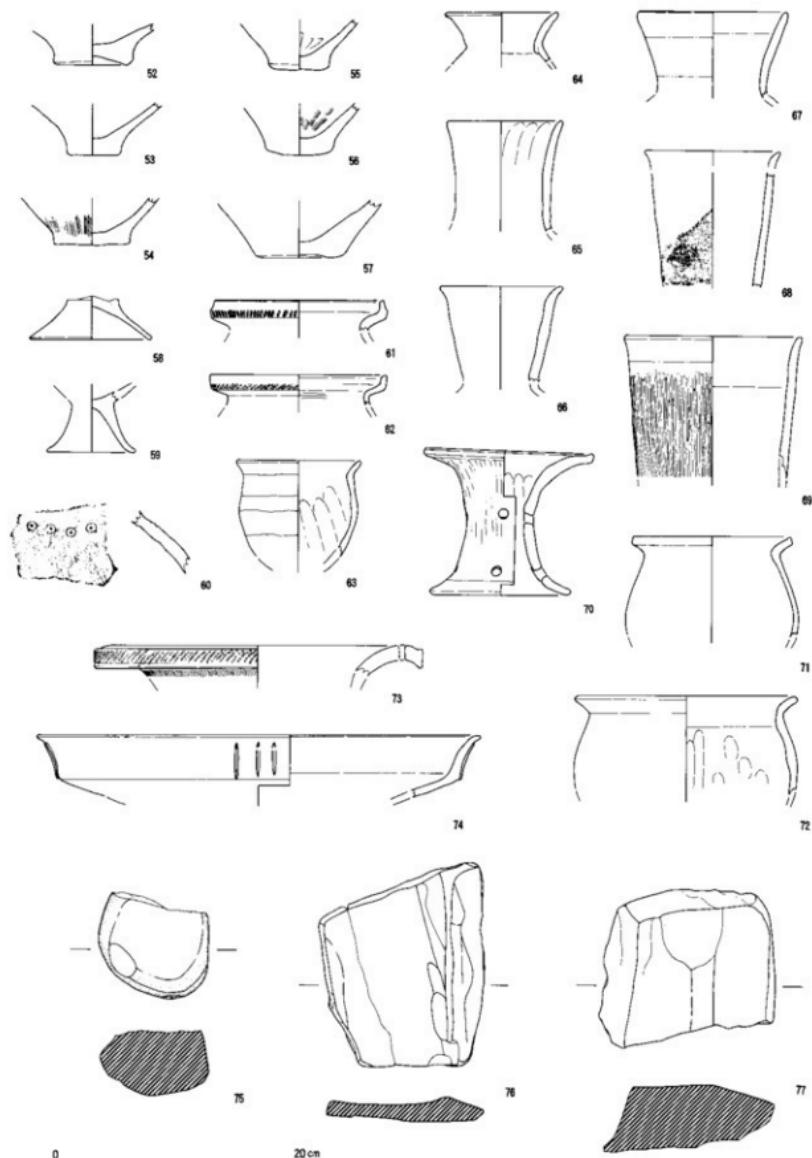
弥生土器小型壺(63) マキアゲ痕の目立つ小型の壺で、く字形に外反する口縁部からなる。



第10区 出土遺物実測図〈1〉 (13のみ1:2, 他は1:4)



第11図 出土遺物実測図(2) (44・45は1:2, 他は1:4)



第12図 出土遺物実測図〈3〉(1:4)

弥生土器広口壺(60・64・73) く字形に外反してのびる無文のもの(64)と、強く外反して口唇部に刺突文をめぐらすものの(73)とがある。(73)は頸部外面はハケメ調整され、口縁部に穿孔がみられる。また、(60)には竹管文をめぐらす肩部片である。

弥生土器長頸壺(65～69) 口縁部がやや外上方に開くもの(66・67)と直上に長くのびるもの(65・68・69)がある。(68)にはヘラ状工具によるマークをもつ。

弥生土器蓋(58) 山形に開く形態で、端部はやや角張らせておさめてる。

弥生土器高杯(74) 杯部に稜をもち、口縁部が外上方に開く。外面に3本単位の棒状浮文を貼りつける。

弥生土器器台(70) 受部と脚部がゆるやかに外反するもので、分化が明瞭でない。体部中央と脚根部に円孔が施され、外面はタテ方向にヘラミガキされている。

弥生土器脚台片(59) 上部の形態は不明であるが、脚付鉢の脚部であると考えられる。

弥生土器底部片(52～57) (52)はややあげ底気味となるが、他は平底で、外上方にのびる体部へとつづく。(55・56)には、内面に「クモの巣」状のハケメが施されている。

叩石(75) 流紋岩系の円錐で、小口面に叩打痕が認められる。

砥石(76・77) 片岩系の板状の石材で、擦痕とみられる円滑面が認められる。

旧河道S R 413第I・II層

弥生土器広口壺(51) 大きく外反する口縁部で、口唇部を垂下させ、竹管文を施した円形浮文を貼りつけている。外面の一部に赤顔塗料が認められ、東海地方の影響がみられる。第II層から出土。

弥生土器底部片(46～50) (48)はやや、あげ底気味だが、他は平底のもので、外上方へ開く体部へとつづく。第II層から出土した。

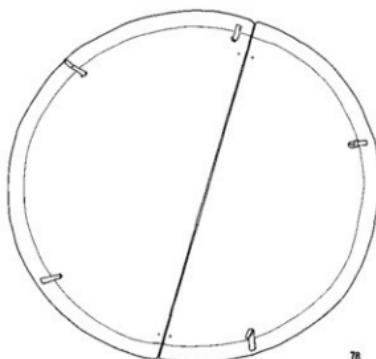
石庵丁(45) 内両部に刃部をもち、2個一対の円孔を穿つ。緑泥片岩製と思われる。第I層より出土した。

古墳時代の遺物は、竪穴住居S H410・土坑S K409および溝S D404などから出土している。

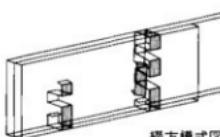
溝S D404

須恵器蓋杯(4～7) 杯蓋(4・6)は、ともに天井部外面を2/3以上回転ヘラケズリを施したもので、(4)が口径11.2cmと小ぶりで、縫や内傾する口縁端部の面に鋭さを残すのに対し、(6)は口径が14.9cmとやや大きく、口縁端部も段となる。(4)は陶邑編年のT K47型式に、(6)はMT15型式の新しい部分に相当する。

杯身(5・7) (5)が口径12.1cm、(6)が口径13.5cmなどで、底部外面は2/3以上回転ヘラケズリする。口縁端部は(7)が内傾する面をもつのに対し、(5)は段となる。ともにMT15型式に含まれると思われるが、(5)は(6)同様やや後出的な要素がある。



0 20 cm



縫方模式図

第13図 出土遺物実測図(4)(1:4)

須恵器高杯(11) 長脚1段スカシの高杯で、脚端部は内折して端面で接地する。スカシは三方向から穿つ。MT15型式に相当する。

須恵器広口壺(12) 外反して開く口縁部。口唇部に一条の凹線がめぐらされる。頸部外面は回転カキメ調整される。

土師器杯(9) 口径10.4cm、器高6.3cmをはかる。平底で内弯しながら直上にたちあがり、器高が高い。口縁端部付近のみヨコナデを施し、端部を尖り気味におさめている。

ミニチュア土器(10) 口径2.7cm、器高3.1cmと小さく、手捏ねの土器で、厚手の底部にユビオサエ成形した口縁部からなる。

堅穴住居S H410

土師器杯(14・15) 口径13.0cm、器高4.3cm前後で、平底で内弯しながら外上方にたちあがり、口縁部内面に内傾する面をもつ。端部は尖り気味におさめる。

土師器壺(16) 口径4.8cm、器高5.0cmをはかる。体部が内弯してたちあがり、口縁部がく字形に外反する。端部はまるくおさめる。

土坑S K409

土師器壺(17) く字形に外反する口縁部からなる。口唇部に面をもつ。

(3) 飛鳥時代

飛鳥時代の遺物としては、旧河道S R413の第II層から、比較的まとまって出土した。

旧河道S R413第II層

須恵器蓋杯(18・19・21～31・37) 杯蓋はつまみを貼りつけ、口径9.8～10.5cm前後の内面に明瞭なかえりをもつもの(21・23)と、口径14.9cmと大ぶりで、やや扁平なつまみと短いかえりを内面にもつもの(25)がある。

これに対し、杯身は、口径9.0～9.3cmで、短く内傾するたちあがりをもつもの(18・19)、口径9.8～11.3cmで、内弯して直上にたちあがる椭形のもの(22・28～31・37)、口径10.1～10.4cmをはかり、平底で外上方にまっすぐたちあがる体部からなるもの(24・27)がある。

(37)には底部外面にヘラ記号がみられる。(26)は

やや内側に外下方にふんばった高台をもつもので、口縁部付近が強く外反する。

これらは飛鳥II～III期に相当するもので、7世紀中葉頃のものである。

須恵器長頸壺(43) 口頸部上半を欠くが、三方に方形のスカシをもつ高い高台に、中央付近に最大径をもつ算盤玉形の体部からなる。体部中央には凹線で画された文様帶があり、回転を利用した右上がりの波状文が施されている。なお、体部下半にヘラ記号がみられる。

土師器杯(36) 内面に暗文をめぐらし、体部が内窓して開き、口縁部内面に内傾する面をもつ、杯Cと呼ばれているものである。口径15.9cm、器高5.5cm、法量指數35をはかる。

土師器碗(32～35) 口径10.1～12.3cmの外面にユビオサエ痕の目立つ在地系の椀である。

土師器高杯(41・42) 杯部片(41)は杯底部と稜をなし、外上方に開く口縁部で、脚部片(42)は脚胴部にタテ方向のユビナデが施され、脚裾部が大きく開くものである。両者が同一個体かどうかは不明である。

砥石(44) 磨灰岩製で、長さ8.7cm、厚さ2.1cmの立方形のものである。円滑面が四方にみられる。

木製品曲物(78) 曲物容器の蓋と考えられ、側板の一部が欠失していた。円板は、径28.4cm～29.4cmとほぼ円形で、中央で2分割して出土したが、分割箇所を挟んで2個一対の円孔が2ヶ所に認められ、円板の破損後なおも補修して使用していたとみられる。

側板との接合は、円板周縁を一段低く作り、側板を立てる。5ヶ所に設けられた棒皮を綴じ組として連結させている。

綴じ合わせは、円板を下にした場合、左前に打ち合わせ、「2列前外3段後下内上外2段綴じ」で、前列は「内面返し留め」される。

旧河道S R413第I層

須恵器蓋杯(20) 口径9.8cmの短いたちあがりをもつ杯身で、底部外面はヘラ切り後未調整である。

(4) 奈良時代

奈良時代のものは、旧河道S R413の河道機能停

止後に堆積した第Ⅰ層で若干出土した。

旧河道 S R 413 第Ⅰ層

須恵器杯蓋(38・40) 口径16.0cmのかえりをもたないもの(38)と、口径20.6cmと大ぶりで扁平なつまみをもち、内面に痕跡的に退化したかえりをもつもの(40)がある。飛鳥V期～平城宮II期に相当するものと考えられる。

須恵器杯身(39) 口径14.4cm、器高3.7cmで、底

部のやや内側に断面方形の高台を貼りつけたもので、高台は底面全体で接地し、底部が中心に向かって下方に突出気味となる特徴をもつ。(38)と同時期頃のものであると思われる。

柱穴出土遺物

土錘(13) 長さ5.2cm、最大径1.8cm、重さ10.3gをはかる棒状土錘。

5 結語

(1) 伊賀地域の弥生土器とムラ

出土した土器は、S R 401で中期後半の受口壺や縁壺(以下「受口壺」と略す)および後期の高杯が河川堆積物中よりみられ、S R 413からも後期の長頸壺をはじめ、広口壺・受口壺・壺・高杯・器台・蓋などが出土した。

これらの土器のうち、近江系とされる受口壺は、伊賀地域はもちろん南伊勢を除く伊勢地域でも一定量の存在が認められている。しかし、伊賀地域に関しては、文様の全容を知るものは多くない。

上野市伊賀国府跡前田地区では中期後半のもの(第14図)がみられ、近江でも湖東地域の野洲川流域に特徴的なヘラ描き文が文様中に認められる。

後期になると多少例が増え、上野市山ノ野川遺跡や才良遺跡、高賀遺跡のものがあり、その型式的な流れは近江地域と似ている。

伊賀国府跡前田地区的例や当遺跡出土例(第10図1)、さらに名張市下川原遺跡の例も含め、伊賀地域出土の中期後半の受口壺には、口縁端部にキザミメを施すのが特徴的に認められる。これは後期のものにはみられず、中期後半に限り、伊賀地域の特色とできる可能性がある。

また、広口壺のうち浮文や列点刺突文などで加飾し、あるいは赤顔塗料の痕跡も認められるものがあり、これらは東海地方との関連で捉えられるものであろう。

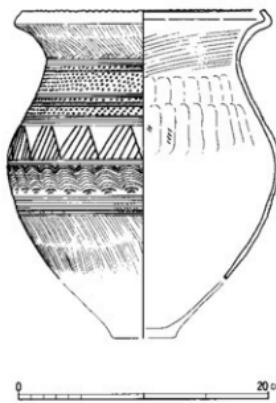
全体としてみると、長頸壺の存在が目立つなど畿内的な色彩が強いが、近江や東海系の土器の影響も受けた混在的な様相を示すのが、森脇遺跡を含めた

伊賀北部地域の中・後期の土器の特徴である。この傾向については、すでに山本雅靖氏が指摘されている。

森脇遺跡ではこれまでの調査で、弥生中・後期の土器が構あるいは旧河道から多量に出土している。しかしながら住居跡等、直接生活に関わるとみられる遺構はきわめて少なく、遺物量に比して遺構のあり方はあまりにも不釣合といえる。

これに対し、城田遺跡や県第3次調査で検出された丘陵に沿ってめぐら人工溝の存在から、当時の住居区は、むしろ森脇遺跡北側の丘陵上に展開していると推測されている。

伊賀地域では、近年の調査で弥生前期～中期の遺跡も散見されるようになったものの、中期後半以前



第14図 伊賀國府跡前田地区出土土器 (1:4)

は住居跡などの遺構は少なく、後期になって遺跡数の急速な増加が見込まれている。弥生後期段階の遺跡数の増加は、むしろ他地域でも一般的にみられることだが、伊賀地域においては特にその傾向が顕著にうかがわれる。

(2) 掘立柱建物について

検出された3棟の掘立柱建物は、その重複関係からS B 405はS D 404より古く、S B 406はS B 407より新しい。

またS B 405は、S B 406あるいは407とのいずれとも同時存在是不可能だが、柱穴どうしの重複はみられず、先後関係は不明である。

これらの建物は、わずかにみられる柱穴掘方出土の遺物は、細片であるため詳細を欠くが、古墳時代後期以降のもので、S B 405と重複するS D 404についても古墳時代後期～奈良時代の土器を含むことから、古墳時代後期以降に属するとみられる。

県第3次調査時には、隣接する箇所で飛鳥時代とされる掘立柱建物群が10棟ほど確認されており、今回検出された掘立柱建物も、この一群に含まれる可能性が強い。

(3) 飛鳥時代の土器

S R413第II層から出土した飛鳥時代の土器は、須恵器をみると古墳時代タイプの蓋杯である杯Hと、突起状のつまみおよび明瞭なかえりをもつ蓋と椀形の身がセットとなる杯G、さらに口径がやや大きくなり、擬宝珠形のつまみにやや退化的なかえりをもつ蓋と高台付きの身がセットとなる杯Bが出土している。

一方土器は、マキアゲ痕や指頭圧痕を明瞭に残す在地系の椀が量的に多いが、杯Cと呼ばれる畿内系の暗文をもつ杯もみられる。

これらの特徴から、綱ね飛鳥II期に相当し、7世紀第2四半期頃の遺物群であるが、この時期土器の供膳形態にみられる在地系椀主体のなか、少數ながら一定量の暗文土器が介在するのは、松阪市伊勢寺遺跡F区S D 1など、伊勢地方とくに中南勢地域でみられるあり方と共通する。

(4) 森脇遺跡の自然環境

森脇遺跡ではこれまでの調査で、数条の旧河道が検出されている。旧河道の河底にあたる箇所からは、ドングリ貯蔵穴が数基みつかっており、縄文晩期前半の土器が伴っている。

今回の調査では、2条の旧河道が検出されたが、貯蔵穴は発見されていない。しかし、S R401は、平成元年度市調査の際に検出された旧河道に連続するものとみられ、この旧河道からも貯蔵穴が検出されている。

またS R413も、その下流が県第2次調査で検出されていることは前述した。

これら旧河道の埋土からすると、粗砂層の堆積が進んだ時期は弥生中期～古墳時代前期とみられ、以後河川機能は低下し、奈良時代には埋没したとみられる。

貯蔵穴は河底にあたる箇所から検出されていることから、縄文晩期の段階では、貯蔵穴周辺は未だ本格的な河川としては発達しておらず、沢状の凹地であったとみられるが、弥生時代には粗砂～細砂を運搬させる流速のある河川へと変化した。

この原因として、上流部にあたる丘陵部での土砂供給量の増大化すなわち侵食作用の活発化があげられる。前述したように弥生時代の集落は、森脇遺跡の北側丘陵上に位置するとみられ、丘陵に沿って環濠が取り巻く可能性が強い。

当地域周辺の丘陵は、礫層をあまり含まない古琵琶湖層群で構成されており、しかも弥生時代における丘陵部での集落形成は、縄文時代と比べて森林の伐開による植生破壊の進行は著しいと考えられ、丘陵地における保水性の減退、流出土量の増加を招いた。このことが当地における環境変化の、最大の要因となつたと推測したい。

また、S R413にみられた木組み遺構は、護岸および堰、とくに砂防堰の性格をもつものと考えられ、飛鳥時代には治水管理された人為的な河川となっていた。

こうした河川乱流の環境が落ちつくのが奈良時代であり、平安時代以降では歌材の名所として「あわれその森」と歌われるような景観を形成していたのである。

(竹内英昭)

<註・参考文献>

- ① 森川常厚『病院遺跡（第三次）発掘調査報告』三重県教育委員会 1991
三重県教委第1次・第2次調査分および上野市教委調査分については、調査担当者からご教示を得たほか、下記の文献を参照にした。
三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報19』 1988
三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報1』 1990
三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報3』 1992
- ② 森川常厚『澤田遺跡』『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊一』三重県埋蔵文化財センター 1991
- ③ 森川常厚『才良遺跡』『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊一』三重県埋蔵文化財センター 1991
西森平之ほか『才良遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会 1983
- ④ 山本雅靖『唐木谷遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会 1979
- ⑤ 沖島・星野・宇佐「三重県上野市田中遺跡の縄文土器」『古代学研究』第18号 古代学研究会 1958
- ⑥ 谷本継次『山川遺跡』『昭和40年度黒岩園整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1979
- ⑦ 奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』 1978
- ⑧ 奈良国立文化財研究所編『木造集会部殿 近畿古代篇』『奈良国立文化財研究所 史料第27冊』 1985
西村歩「曲輪の細部技法—縫じ方を中心として—」『文化財論集』文化財論集刊行会 1994
- ⑨ 他登川町教育委員会 植田文雄氏および柴東町教育委員会 近藤広氏よりご教示を受けた。
近藤広「功夫遺跡出土の弥生式土器－文様の分析を中心として－」『滋賀文化財だより』No.164 （財）滋賀県文化財保護基金 1991
- ⑩ 他登川町教育委員会 植田文雄氏よりご教示を受けた。
- ⑪ 山本雅靖「伊賀地域の弥生土器」『国説伊賀の歴史上巻』 邦士出版社 1992
- ⑫ 上野市教育委員会 山岡裕氏よりご教示
- ⑬ 竹内英昭『伊勢寺遺跡』『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第2分冊一』三重県教育委員会 1991
- ⑭ 日下推義『歴史時代の地形環境』古今書院 1980



調査前全景（西から）



調査後全景（西から）



旧河道 S R 401 (東から)



掘立柱建物 S B 405~407 (南から)



旧河道 S R413木組み遺構（南東から）



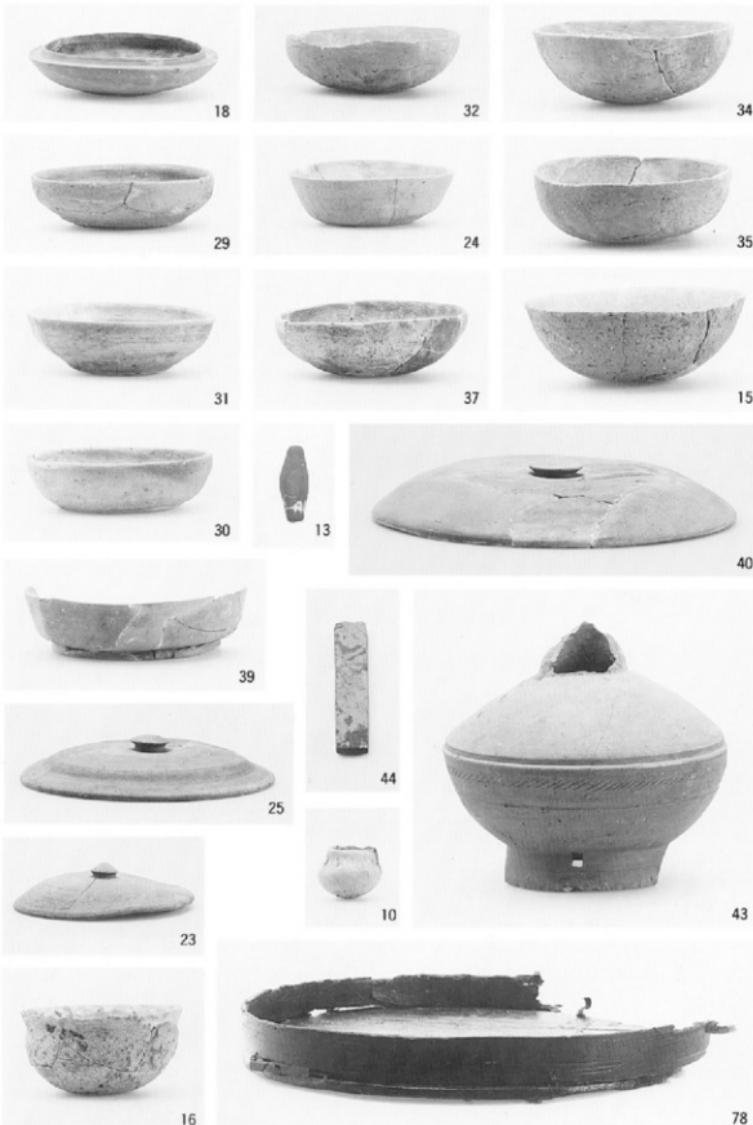
旧河道 S R413木組み遺構（西から）



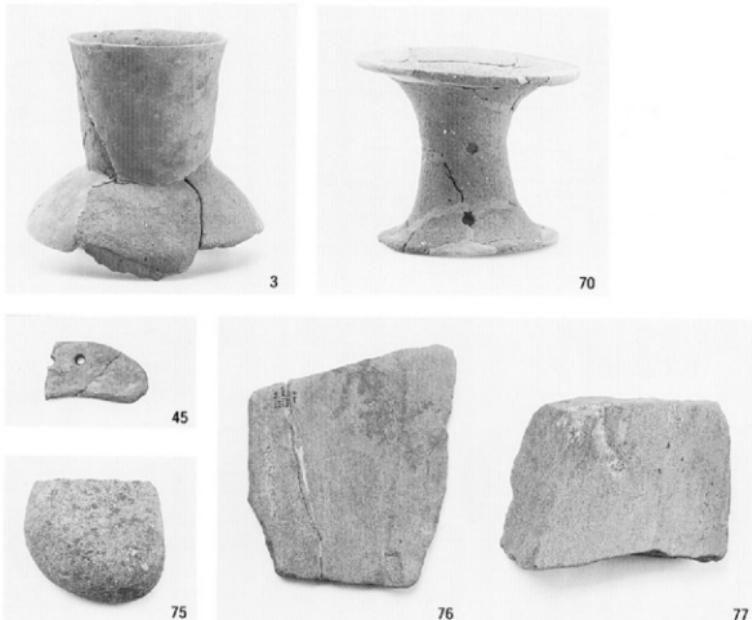
堅穴住居 SB 410・411（北西から）



旧河道 SR 413（南東から）



出土遺物(1)



旧河道 S R413第II层出土土器

出土遗物(2)

II 遊山城跡

1 歴史的環境

伊賀町は旧伊賀国の北東部に位置し、東は鈴鹿山脈と布引山地で伊勢国と、北は近江国と接している。町域の中央には、鈴鹿山脈に源を発する柘植川が形成した河岸段丘が広がり、柘植川に流れ込む多くの支流がこの地域に豊富な水を提供している。このため早くから開発が進み、中世の後期には多数の領主的階層を生み出している。このことは、当町域だけで、130か所近い中世城館跡が確認されていることからも窺い知ることができる。

遊山城跡⁽¹⁾は、広域營農団地農道整備事業に先立つ分布調査によって新たに発見されたものである。行政的には、阿山郡伊賀町愛田字遊山に所在している。なお城名については、所在地の小字によって命名した。

遊山城跡のある愛田は、柘植川の支流のひとつ、靈山に源を発する愛田川が形成した狭い谷間に広が

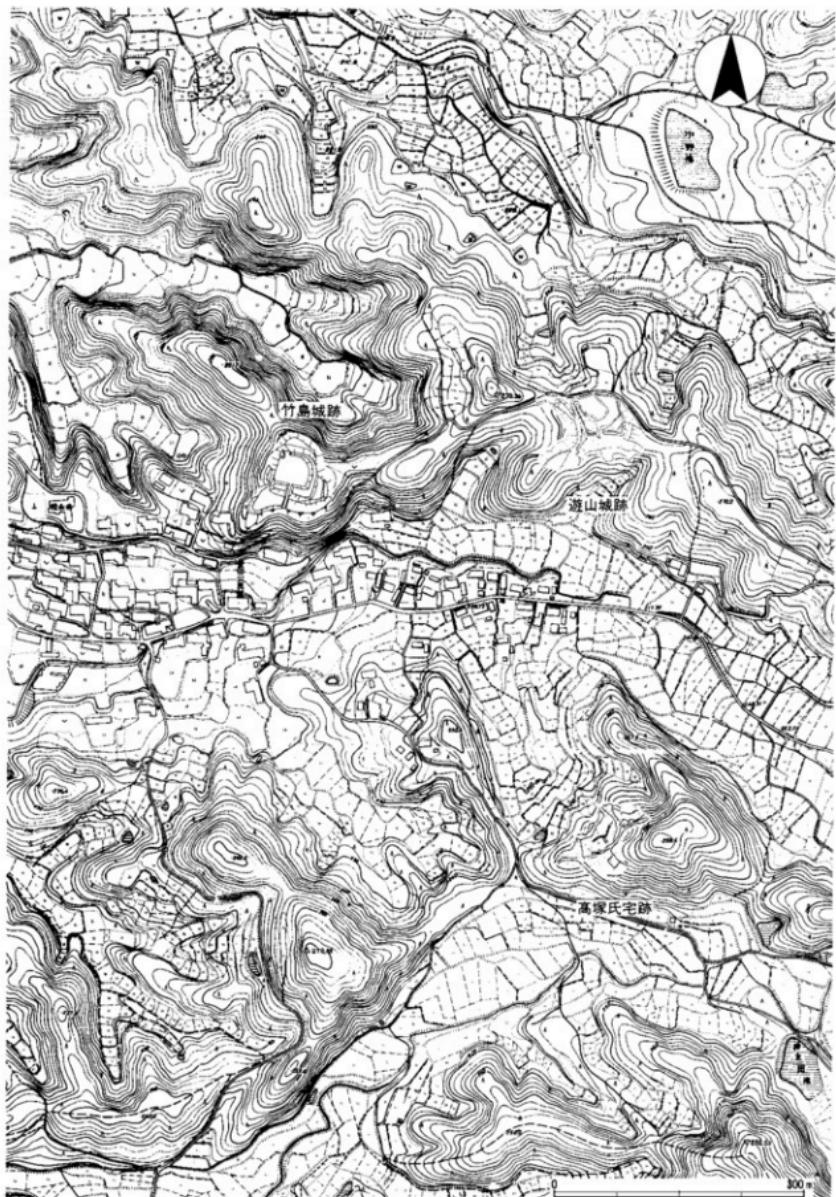
る集落で、遊山城跡は集落北側の丘陵頂部に位置している。付近には、集落南側の丘陵端部に平成5年度同じ事業に伴って発掘調査された高塚氏宅跡⁽²⁾があり、西には近接して竹島城跡⁽³⁾が所在している。また、愛田集落の入口の字種首には日置城跡⁽⁴⁾があり、その西の字日置向にも日置氏宅跡⁽⁵⁾と呼ばれる城館跡が知られている。このうち(4)の日置城跡については現地踏査を行ったが、宅地化や耕地化が進んでおり、現状では郭と認識できるような平坦面などは確認できない。土壘状の高まりは、山の斜面の裾に若干認められるものの、中世城館跡としてはやや疑問も残る。

日置城跡としては、他に下柘植字畠山のもの⁽⁶⁾も知られている。名阪国道によって大部分が破壊されているが、規模は周囲の城館に比べ大きく、付近には中出構・南出構・西堀・馬場・城山などの小字が



第15図 遺跡位置図（1：50,000）国土地理院

1 : 25,000より



第16図 遺跡周辺地形図（1 : 6,000）

残っている。また、他にも前述したように伊賀町には多くの城館跡があるが、出色なのは福地城跡⁽⁷⁾である。やはり名阪国道によって一部破壊されてしまっているが、石墨を伴っており、伊賀地域でも有数の規模と複雑な構造を持つものである。昭和56年度に名阪国道の側道建設に伴って約300m²が調査されているが、そこで石墨や石段・石列などが確認されている。

2 調査の成果

遊山城跡は、農道建設事業に伴う事前の分布調査で、新たに発見された城館跡である。近世に成立した地誌・戦記類にも、該当する城館は記されていない。

調査は城跡全体の過半に及び、最終的な本調査面積は約4,300m²である。主郭の北西及び南西のやや平坦な部分については、遺構が広がる可能性を考慮して試掘坑を設定し確認を行ったが、遺構の広がりは、現状では認められなかった。また、既に大きく破壊されていると考えられる主郭部分についても、確認のためのトレンチ調査と一部面調査を実施したが、遺構・遺物ともに発見されなかった。

調査期間は、調査前の地形測量を含め、平成6年8月22日から同年11月25日であった。

(1) 遺構の概要

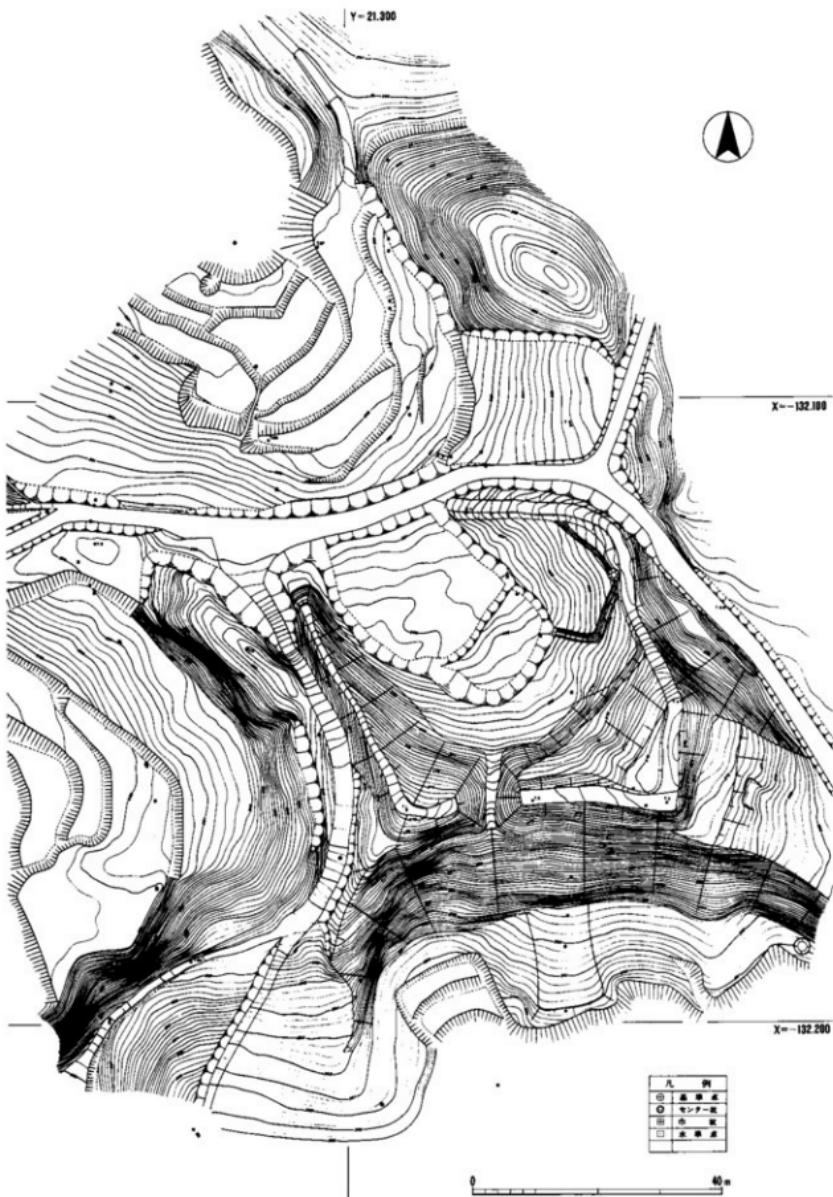
土塁 遊山城の構造は、基本的には四方を土塁で囲んだ方形の郭を中心としている。土塁の規模は、土塁外側上端の計測で、東西約45m、南北約50mである。そしてこの主郭部分を中心に、周辺に若干の付属施設を配している。

主郭の土塁は、北辺が約20mにわたって破壊されているが、土地の古老的記憶では、戦前にはこの部分にも土塁は存在していたということである。現在、付近は杉や桧が植林されているが、戦中から戦後まもなくの頃は田畠に開墾されていた。恐らく主郭部分も含めて、この頃の開墾や土取りなどで破壊されたものと考えられる。

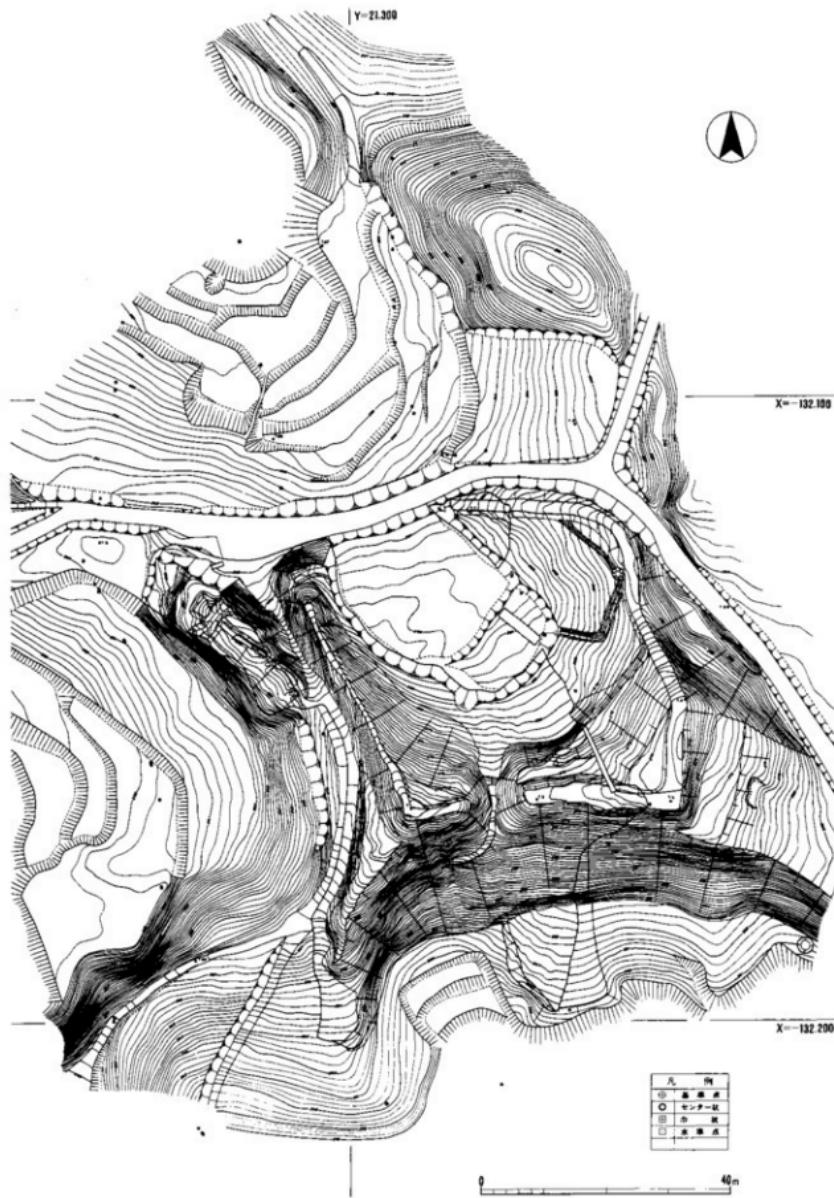
さて、主郭南辺土塁の南斜面は、約10mの比高差をつけて直線的に急傾斜で切り落とされており、防



第17図 調査区位置図 (1 : 1,000)



第18図 調査前測量図 (1 : 800)



第19図 調査後測量図 (1 : 800)

御的には南方向を強く意識した構造となっている。この斜面には、虎口へ続く通路らしき痕跡が認められたが、斜面は崩れやすい砂質土であること、現地は植林地で山仕事のための通路とも考えられることなどから、城存統時期のものであるかどうかは疑わしい。

主郭土壘の構築状況を確認するために、南辺と西辺の2か所で断ち切った。南辺土壘では、上層で明褐色の粗い砂質土が若干認められるものの、土壘のほとんどは風化の進行した花崗岩の岩盤によって形成されている。西辺土壘でも、基底付近ではやはり風化の進行した花崗岩の岩盤に達している。土質は花崗岩の風化した粗い砂で、盛られた形跡はない。従って、土壘は基本的には削り出しによって構築されたものと考えられる。これは、丘陵の頂部という立地条件とともに、加工しやすい花崗岩の風化土壤であることに大きく起因すると考えられる。

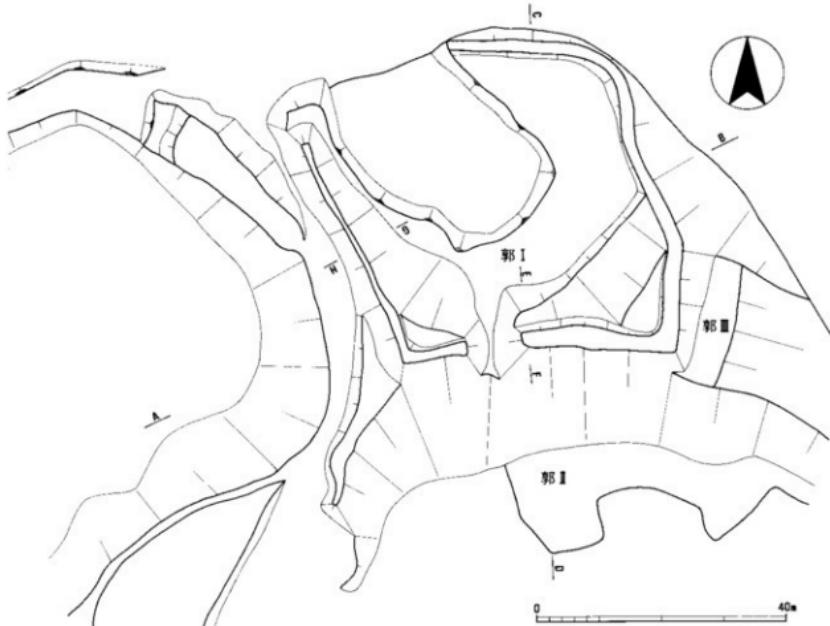
主郭西辺土壘の北西には、V字形の深い堀割りを挟んで、独立した状態での土壘が残存している。堀

割りの掘削は、風化花崗岩の岩盤にまで達している。堀割りの最深部と土壘との比高差は4~5mにもなり、北及び西方向からの攻撃に備えている。しかし遺構の現状では、特に西からの攻撃に対しては防御的に不十分である。

主郭西辺土壘の下には、先述の堀割に続く形での山道がある。破壊を受けているとは言え、不自然に広くなっていることは注目される。西への防衛性や堀割りとの関連性を考慮にいれて、恐らく本来は南方向に、主郭西辺土壘に平行するように土壘が伸びていたものと考えられる。そして、この2本の土壘の間には、通路を兼ねた空堀として機能していたものと推定される。

ところで、この独立状の土壘周辺から、平瓶とみられる須恵器片が出土している。のことから、確証はないものの、かつて古墳が存在していた可能性がある。

虎口 虎口は、南辺土壘に、やや西偏して開いている。虎口形態は、土壘を切断しただけの単純な平



第20図 遺構配置図 (1 : 800)

虎口と呼ばれるものである。虎口の切断形はV字形で、上端幅は約9mと広いが、下端幅は1m程と非常に狭い。木戸などの施設が設けられていたものと考えられるが、それを裏付けるピットなどは検出されなかった。

郭 主郭は、既に指摘したように、後世の土取りなどで大きく破壊されており、郭内施設については不明である。ただ、郭Ⅰとした平坦部は主郭の残存とみられ、西辺土壁に沿っても、わずかにその名残を留めている。これによって主郭面の高さだけはある程度復元することは可能で、南端と北端とでは4m程も下降傾斜している。

主郭の東部分には、現状で「コ」字形の、土居状の低い高まりが続いている。高さは、現状でわずか10cm程である。路線外のため調査ができず、その性格や年代などの詳細は不明であるが、城の存続期のものではないであろう。

南辺土壁の東西の隅には、三角形状の平坦地が設けられている。東は比較的明瞭であるが、西側は崩壊が進んでいる。ここが、遊山城の最高部であること、防護の主眼が南であるとみられることから、物見台や矢櫓などの機能を果たしていたものと考えられる。

この他にも、付属施設と考えられる平坦地が幾つか認められる。

まず南辺土壁下の郭Ⅱは、背後の土壁斜面をさら

に垂直に近く切り落とすなど、人為的な加工が施されており、防備上の郭と認識される。また、ほぼ同じ高さの平坦地が、斜面に沿って東に伸びており、郭Ⅱとともに城の南東方向を守る帶曲輪的な役割を果たしていたものと認識される。調査では、建物や櫓などの施設は検出されなかった。

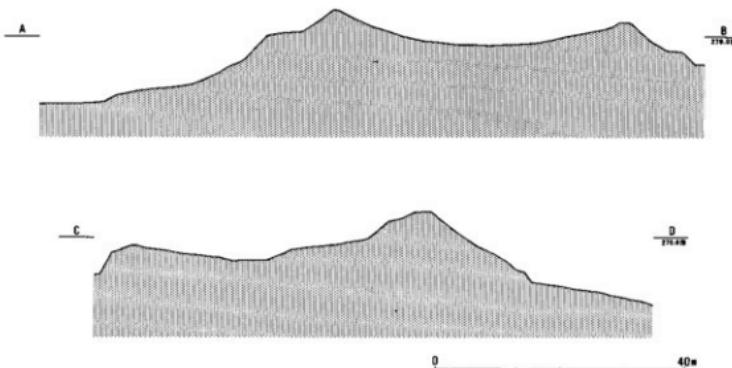
この平坦部分には、調査区外であるが、井戸らしき円形の窪みがある。付近には開墾の跡ではなく、最近のものではないことから、遊山城の存続時のものである可能性は高い。

主郭土壁の南東隅の下に位置する郭Ⅲは、東辺土壁を直線的に切り落とし、コーナーを設けるなど人為的な平坦地とみられ、防備上の郭と認識される。また、現道で切断されているため確定的ではないが、郭Ⅲから東に、若干の緩傾斜をつけた土橋状の平坦地が続いている。この平坦地の南北辺はやはり急傾斜で切り落とされており、人為的で、何らかの防備施設であった可能性が高い。

(2)出土遺物

主郭が大きく破壊されていたこともあって、出土遺物量は非常に少なく、整理箱に換算してわずか1箱であった。また、図示できた遺物も次の4点にすぎない。

1は、口径約9.8cm、器高約6cmの、やや小振りな天目茶碗である。郭Ⅰの虎口付近から出土した。



第21図 立面図（1:800）

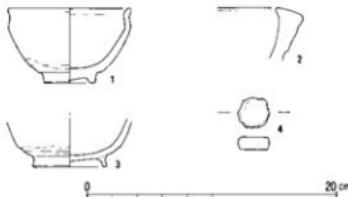
口縁端部は丸みをもって取まり、やや強く外反している。高台は副高台とともに削り出で、後で丁寧に削り痕跡を消している。胎土は、1mmほどの砂粒を若干含んでいるが比較的緻密で、焼成も良好である。高台部分を除いて黒褐色の釉を施している。年代は、16世紀の第4四半期ごろと考えられる。

2は陶器壺の口縁部分で、常滑産と考えられる。郭Iからの出土で、付近からは、接合できないものの同一個体と考えられる陶器壺の体部片も出土している。胎土には、5mmほどの小石が多く含まれている。焼成は良好で、全面に濃褐色の釉が施されている。年代は、1の天目茶碗と同時期の16世紀の第4四半期ごろと思われ、遊山城の存続時期のものと考えられる。

3は陶器碗で、やはり郭Iから出土した。外面は底部から体部下半にかけて、回転ケズリが施されている。高台は貼り付けである。胎土は緻密で、焼成

も良い。高台部分を除いて、淡緑色の灰釉が施されている。年代は確定的ではないが、16世紀末から17世紀の初め頃と推定される。

4は、施釉陶器片を円形に加工したものである。陶器片を円形に打ち欠いた後、不完全ながら石などで擦って形を整えている。類例は県下でも数多く確認されているが、その用途・目的については不明である。

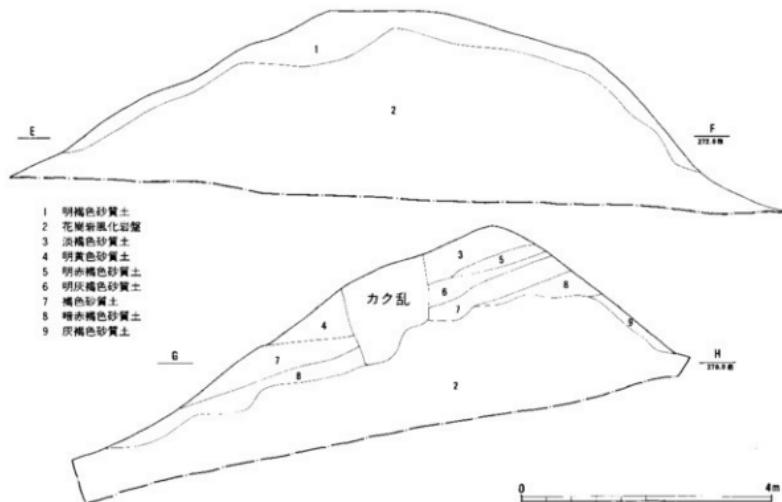


第22図 出土遺物実測図 (1 : 4)

3 結 語

今回の調査は遊山城跡の大部分に及んだが、既に破壊されている部分もあり、また出土遺物も極端に少なかったことから、その全体像を完全に明らかに

するまでは到らなかった。よって以下において、遊山城を取り巻く中世後期の伊賀国の在地情勢を考慮に入れて、遊山城の歴史的な性格を検討して結語



第23図 土壌断面図 (1 : 80)

としたい。

(1) 中世後期の伊賀

中世後期の伊賀国には、仁木氏が室町幕府によつて守護に任命されていた。しかしその守護大名領主権力は相対的に未発達で、領域支配も極めて弱いものであったとされている。³³このため中世後期の伊賀国では、早い段階から在地領主ないしは小領主階層（土豪・地侍層）を核とした結合組織が形成されていたと考えられている。『満済准后日記』正長2年（1429）2月16日及び同23日の条に見える「柘植三方」は、中世後期における伊賀国での結合組織の存在を確認できる最古のものである。また同記によつて柘植三方が、具体的に日置方・北村方・福地方であったことがわかる。

ところでこの「三方」という表現であるが、同様の事例としては、岩瀬方・坂方・須原方で構成された、中世の自治組織として著名な山田三方を挙げることができる。山田三方の場合は都市的な場に形成されていた点で、柘植三方とは構成員の階層などで相違もあると考えられるが、少なくとも当該地域の周辺で、ある程度完結された組織集団が「方」と呼ばれていたことを確認することはできるであろう。そしてこの様な「方」集団の典型は、伊賀国に隣接する大和宇陀の郡内一揆において認めることができる。

宇陀郡内一揆では、沢・秋山・小川などの個々の「方」は、盟主ないしは惣領家と言ふべき「イエ」を中心に、擬制的なものを含めた血縁によって結ばれた「同名」集団と、地縁的な「与力」集団によつて構成されていた。宇陀郡内一揆と構造的に類似しているとみられる近江の甲賀郡中惣も、「方」集団の連合体であると判断されよう。つまり伊賀の柘植三方は、こうした「方」集団の存在を示す最も早いものと言うこともできるのである。永禄5年（1562）と推定される六角義弼書状にある「柘植庄同名中」は、この「柘植三方」と同質、もしくはそれを母体とした組織であると考えられる。

「方」集団の構造は、個々の置かれた様々な状況によって、若干の相違は当然存在したはずである。伊賀国の場合、例えば天文2年（1533）且那衆差入

状にある「服部高畠のいちそく」や「宮田のいちそく」は、同族結合の存在を示している。また、「足軽停止」の件で甲賀郡中惣から報告を受けた「見ふの・さなこ・河井三里」などは、地縁的な結合を主体としていたと考えられよう。

『多聞院日記』によると、名張郡古山の杉原氏は、知行20石で12、3人の被官を抱える土豪であった。彼が伊賀國の土豪の典型であったかは不明だが、一つの指標となる存在である。恐らく、こうした土豪らが盟主の「イエ」を中心に、地縁的ないしは血縁的に結合したのが伊賀國の「方」集団であったと考えられる。そしてこのことは、伊賀における城館の分布の在り方とも、密接に関係すると思われる。例えば遊山城の周辺で見るならば、福地城や日置城をそれぞれ福地方・日置方の中心城郭と考えて、辺りに点在する多くの城館の分布を、「方」集団と関連付けて把握することも可能であると考える。

(2) 伊賀惣国一揆について

中世後期の伊賀国においては、「方」集団ないしはその連合組織の分立する姿を想定した。しかしここで問題となるのが、これら「方」集団と伊賀惣国一揆との関係である。つまり惣国一揆は、一揆結合としてどこまで組織的なものでありえたのか。言い換えれば、はたして「方」集団を強固に掌握し、規制し得る存在でありえたのか、と言う問題である。「伊賀惣国」と言う言葉が史料上で初めて確認できるのは、天文2年（1533）である。³⁴よって、遅くとも天文年間（1532～54）の初め頃には、「伊賀惣国」という意識が存在していたことは確かである。しかしこの段階で、惣国一揆が組織として強固に存在していたとは考え難い。むしろこの段階では、組織的な結合の主体はあくまでも「方」集団、ないしは柘植三方のような「方」連合組織であったと考えられる。

從来、惣国一揆については、石田善人氏によって紹介された一揆契状を中心として考察されてきた。しかし、稻本紀昭氏が詳細に示されたように、契状の成立自体は永禄3年（1560）であったと考えてよく、その内容からみても、軍事的な緊張の高まりを前提として作成されたものであることは明らかであ

る。つまり『山中文書』に残された伊賀惣一揆契状は通常の一揆契状とは異質のもので、極めて臨時性と軍事性の強い契状であるといえる。

惣一揆の成立は、稻本氏の言うように、外敵の進入と言う具体的な軍事緊張の高まりを契機にしていたものと考えられる。しかも、惣一揆契状が甲賀山中氏に残されていたことや、元亀4年(1573)と推定されている書状断簡の内容からみて、惣一揆の組織そのものが、甲賀郡中郷との軍事同盟を目的とした存在であった可能性の高いことは明らかである。つまり惣一揆は、対内的には極めて政治性的希薄な存在であり、分立する諸集団を強固に規制しようるものではなかったものと判断される。

(3) 遊山城の構造的性格

遊山城の性格については、発掘調査の結果などから、まず次の何点かを指摘ないしは想定することは可能であろう。

①存続年代は、概ね16世紀の後半期を中心であると考えられる。

②構造や規模、及び位置的について、特に竹島城とは極めて深い関係にあったと考えられる。

③防御性を重視した構造で、その主眼は南方向である。

④しかし、防御的には未だ不完全な部分を残しており、城としての完成度は相対的に低い。

⑤については、数少ない出土遺物からの判断にしか過ぎず、必ずしも確定的ではない。しかし遊山城を取り巻く様々な歴史的状況からみても齟齬はなく、妥当な比定と考える。

次に⑥について。遊山城の縄張り構造は、前にも述べたように、四方を土塁で囲んだ方形郭が中心であり、竹島城と基本的な構造の差異はない。この点、伊賀地域の大半の中世城館とも同じである。主郭の規模も竹島城とほぼ同じであり、虎口の方向も共

《注》

- (1) 吉澤良「高塚宅跡」(三重県埋蔵文化財センター 1994年)
- (2) 駒田利治『福地城跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1982年)
- (3) 稲本紀昭「伊賀惣守護と仁木氏」(『三重大学教育学部研究紀要』38)
- (4) 読群書類從
- (5) 西山克「戦国大名北畠氏の権力構造—特に大和守代内一揆との関係から」(『史林』62・2)
- (6) 「古今消息集」2(稻本紀昭「室町期伊賀國人關係史料」「菊永氏城跡発掘調査報告」所収 阿山町教育委員会・阿山

通している。また、距離的にも非常に近い。しかし、遊山城の立地は山頂ともいべき所で、近接する竹島城や高塚氏宅などの城館跡に比べると、はるかに高い位置にある。

次に、その立地条件によって、遊山城の縄張りは自然地形に大きく制限されたものとなっているが、同時に、それを巧みに利用して防御性を高めていることも注目される。特に、東方向を除く三方からは急峻な谷が迫っており、自然の防御となっている。また、主郭土塁南面に設けられた高い急傾斜や、主郭北西の深い堀割りと推定される二重土塁の存在も、この城の防御性の高さを示している。この点、居住性を重視し、主に居館として機能していた伊賀地域の城館跡の大部分とは、ややその性格や目的を異にしていると言える。以上の点からみて、一つの可能性として、遊山城を竹島城などの周辺城館の詰城的なものとして理解することもできるのではなかろうか。

しかし、防御的に未完成とみられる部分を残していることも事実である。特に南西方向に対しては、防備が弱いように思われる。

測量図からは外れているが、空堀跡と推定した山道は、細い尾根を経て、南西に突出した平坦地へと続いている。この平坦地には、現在も地元の信仰の対象となっている祠が祭られている。この平坦地が何時造られたものかは不明であるが、周囲の斜面は比較的緩やかで、郭のようではない。また、この平坦地と主郭をつなぐ細い尾根にも、堀切などの防御は施されていない。つまり、この方向からの攻撃に対しては無防備に近く、城としての完結性を著しく欠いていると言わねばならない。これは、遊山城が方形単郭を主体とする単純な構造であることも加味して、城が築かれた時期的、また築城主体の階層的なところに起因しているものと考えられる。

(小林 秀)

町歴史調査会 1987年)

(7) 「米良文書」(熊野御所管大社所蔵)

(8) 「山中文書」某書状断簡(稻本紀昭所蔵)

(9) 「多聞院日記」天正1年8月19日条

(10) 「伊賀守村」天文2年3月2日条(『大和花文書』内閣文庫所蔵)

(11) 石田善人「甲賀郡中郷と伊賀惣守護一揆」(『史源』2)

(12) 稲本紀昭「室町・戦国期の伊賀國」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第17集 国立歴史民俗博物館 1988年)

(13) 注(6)と同じ。



南辺土墨調査前風景（西から）



南辺土墨調査前風景（東から）



虎口調査前風景（北から）



調査作業風景（南から）



調査作業風景（南から）



南辺土壠（南西から）



虎口周辺（北から）



堀割（北西から）



南辺土壌断面（西から）



西辺土壌断面（北から）

報告書抄録

ふりがな	もりわきいせき ゆうやまじょうあと						
書名	森脇遺跡(第4次)・遊山城跡 発掘調査報告						
副書名							
巻次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告						
シリーズ番号	125-2-2						
編著者名	竹内英昭・小林秀						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503						
発行年月日	西暦1995年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
森脇遺跡	三重県上野市 市部字森脇	206	671	34° 43° 40°	136° 9° 15°	19940704～ 19940831	1,500	農林漁業用揮発油 税財源身替農道整備事業
遊山城跡	三重県阿山郡 伊賀町愛田 字遊山	481		34° 48° 30°	136° 14° 00°	19940822～ 19941125	4,300	広域営農団地農道整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
森脇遺跡	集落跡	弥生時代以降 古墳時代～ 奈良時代	旧河道 溝 堅穴住居 獨立柱建物 土坑	2条 1条 2棟 3棟 3基	弥生土器、土師器、 須恵器、ミニチュア 土器、曲物、砥石、 石庖丁
遊山城跡	城館	中世末期	郭・土塁		陶器壺・碗

平成 7(1995) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 6 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 125-2-2

森脇遺跡（第4次）・
遊山城跡発掘調査報告

1995.3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 オリエンタル印刷株式会社